

Vent

音楽教育 ヴァン

VOL. 61



特集①

小学校の学級担任が語る、
音楽科の意義

特集②

新しい「高等学校 芸術科 音楽Ⅱ」の教科書
『高校生の音楽2』『MOUSA 2』のご紹介
[高等学校用教科書 内容解説資料]

特別インタビュー①

LEO 箏が人とつないでくれる

特別インタビュー②

Dr. Capital 音楽を“増やす”ために

参考楽譜

リコーダーで吹ける旋律集

教師としての「キャリア＝生き方」をデザインする

学校教育を取り巻く環境が急速に変化、多様化し、教育も社会もそのあり様を大きく変えなければならない時代が来ています。音楽科教育としても、その存在意義や課題、可能性をあらためて自ら問い直すとともに、学級担任や他教科等、異なる学校種の教員、地域とも主体的に対話し、関わりをこれまで以上に開いていくことが求められます。その意味でも、学級担任の先生方に音楽科の意義等を語ってもらうという今回の特集「座談会」は、時宜を得たものだと思います。自由裁量の部分が増えると考えられる次期学習指導要領のもとでは、教師自身により一層協働的な探究力や戦略的な構想力が必要になると考えます。部活動の地域展開など先の見えづらい状況だからこそ、音楽科教育に携わる一人一人が自らの音楽的な見方・考え方を捉え直しつつ、「あたりまえ」となっているものに対する新たな意味付けの可能性に気づき、教師としての「キャリア＝生き方」を主体的にデザインすることが大切ではないでしょうか。

佐野 靖(徳島文理大学 副学長/東京藝術大学 名誉教授)

Contents

- 3 | 特集①
小学校の学級担任が語る、音楽科の意義
- 8 | 特集②
新しい「高等学校 芸術科 音楽Ⅱ」の教科書
『高校生の音楽2』『MOUSA2』のご紹介
[高等学校用教科書 内容解説資料]
- 16 | 特別インタビュー①
LEO (箏奏者)
- 19 | 特別インタビュー②
Dr. Capital (音楽博士)
- 22 | 音に触れる感動を－鑑賞教室－①
小学生3万人が体験するオーケストラの生演奏
心の教育ふれあいコンサート
- 26 | 音に触れる感動を－鑑賞教室－②
友達と共有する“わが京都”の響き
取材協力：小山文加(音楽学・アートマネジメント/ユースワーカー)
- 30 | Kyogei Presents
音楽診断
[第26回] 女性作曲家編(監修・解説：萩谷由喜子)
- 32 | Information
- 34 | 参考楽譜
リコーダーで吹ける旋律集
- 38 | エッセイ
新・音から広がる世界 [第21回] 藤原道山



*本誌に記載されている職名は令和8年3月現在のものです。

小学校の学級担任が語る、 音楽科の意義

今号は、コロナ禍を経て7年ぶりに帰ってきた
ヴァン恒例企画の座談会をお届けします。
東京都と山梨県の小学校で指導される学級担任の先生方にお集まりいただき、
館雅之先生(神奈川県横浜市立太尾小学校 校長)の進行のもと、
音楽科教育の意義を多角的に語っていただきました。
時代とともに学校教育が大きく変わろうとしているこのタイミングで、
4人の先生方の豊富な実践経験と担任ならではの視点から、
あらためて音楽科の果たす役割を見つめ直します。

参加者

山根大幹先生

東京都港区立
青山小学校
主任教諭

参加者

高野淳美先生

東京都日野市立
日野第八小学校
主幹教諭

司会

館 雅之先生

神奈川県横浜市立
太尾小学校
校長

参加者

和智宏樹先生

山梨県上野原市立
上野原小学校
教諭

参加者

徳永明子先生

東京都日野市立
平山小学校
主任教諭



学級担任だから見える子どもの姿

館：まずは、学級担任の立場から専科教員との違いや強みを伺っていきたいと思います。

山根：私は前任校まで音楽の専科でしたが、今は希望して学級担任をしています。1日を通して一定の児童が見られることは、やはり担任の大きなメリットだと思います。子どもどうしのトラブルがあっても後の授業でフォローしたり、一緒に遊ぶ中で声かけができたり、アフターケアも含めて一貫して見られるよさを感じています。

高野：私は特別支援学級の担任をしているので、1日の子どもたちの変化がよく分かります。例えば、登校時は少し機嫌が悪くて、給食を食べて復活して午後の授業に臨むというような。児童の状態を把握していれば、大抵のことはその日のうちに解決して次の日を迎えられる。専科の先生では、担当の授業が1週間後ということも珍しくありません。その面は大きく違うと思います。

徳永：1日の流れの中で子どものケアができるのは担任のよさですが、ある意味で次の授業のしがらみになってしまうときもあります。専科の先生がいらっしゃると、そういうところを抜きにして新たな気持ちで対応できるので、そのよさも感じますね。

和智：どちらも一長一短ですね。担任だと、多様な子どもの性格を一人一人理解してその子に合わせた指導ができますが、一方で厳しく指導したあとにいきなり元気よくやっても子どもはついてこられないし、教師も気持ちの切り替えが難しくなる。その点、先生が代われば子どももすなおにリセットできますね。

館：専科と担任それぞれで教えるよさがありますね。皆さ

○ 山根大幹(やまね・だいき)

東京都港区立青山小学校 主任教諭



音楽は心を耕し人として大切なことを教わる学習だと、担任として音楽を指導しながら感じます。

○ 館 雅之(やかた・まさゆき)

神奈川県横浜市立太尾小学校 校長



学校や地域の中に音楽が生きていて、まさに音楽が学校文化をつくっている——

んは学級担任として複数の教科を受け持つ中で、音楽の授業だからこそ見られた子どもの姿や他教科とのつながりを感じる場面はありますか？

徳永：前任校から専科の先生が充実しており、音楽を直接教える機会はありませんでしたが、1年担任時は必ず授業に同行し、サポートや参観を行っていました。国語には多くの詩が登場するため、音楽で習った曲の旋律を詩にのせて歌うなど、教科横断的な学習を取り入れています。また、音楽専科の先生が授業冒頭で行う「音やリズムでの自己紹介」を参考に、学級内でもスタートカリキュラムとして実践しました。専科の指導法を他教科の学習に生かすことで、教科の枠を超えた豊かな学習環境を整えるなど、学級づくりに役立っています。

館：いいですね。教科の学びが学校生活の中で自然とつながっていて、とてもよい状況を思い浮かべました。

和智：近年では「教科横断的な学び」が重要視されていて、言葉だけ見ると何かすごいことをしなければいけない感じがしますが、特に低学年はそのくらい緩やかに他教科と関連させて、教科横断的な学びのデザインを考えるのがよいのかもしれない。

山根：学年が上がり音楽の学習が積み重なってくると、例えば、国語では言葉の繰り返しに子どもたちが気付いたり、強弱や速度を変えた音読の工夫ができたりします。九九を覚えるときもリズム感が自然と生きていますし、音楽と他教科との接続はすごく感じます。

学級経営と音楽

館：山根先生は音楽専科も学級担任も両方を経験されたう

えで、担任として音楽を教えることをどのようにお考えですか？

山根：私は学級担任として音楽に関わることを大切に思っています。音楽科の資質や能力を身に付けさせることも大事ですが、やはり音楽は心を耕し人として大切なことを教わる学習だと、担任として音楽を指導しながら感じます。東京都では制約上難しいかもしれませんが、6年生の担任で音楽を教えることが私の夢なんです。もちろん専科と担任がタッグを組んでもよいのですが、担任には最終的に学年を一つにまとめられるよさがあるので、専科のときに培った専門性を生かしながら担任として指導することに挑戦してみたいと思ったんです。

徳永：山根先生のように、専門性をもった方が担任をされることはすてきだと思います。私は1年生の担任をする機会が多いので、例えば「なべなべ そこぬけ」などの遊び歌を取り入れています。最初は2人、次は4人と、だんだん輪を広げて最後は全員で。そうやってクラスの一体感をつくっていくのですが、担任ならこの活動を、音楽の時間にも、体育の時間にも柔軟に広げることができます。教科の枠にとらわれず、その時々で自在に結び付けられるのは、担任ならではのですね。

和智：私は昨年度6年生の担任で音楽の授業を担当しました。ごめんなさい、山根先生の夢を先に……。

全員：(笑)

和智：山梨県では基本的に専科の採用枠がないので、学級担任が教えています。私も担任で音楽を教える立場から言うと、人間関係の構築と音楽は密接だとふだんから感じています。音楽科では子どもたちのさまざまな表現を受け入れ認める雰囲気づくりができますよね。また、学級経営を専門に研究されている先生から、即興的な表現活動は人間関係のベースがないとできないし、さらなる関係構築にも寄与するという話を伺い、やはり音楽には人間関係づくりに必要な力を育成するための学びが散りばめられていると思いました。

高野：人間関係ができていないと、安心して表現できないですね。「向かい合って歌ってごらん」と言ったときに、クラス替えの直後だと声が出せない子もいます。音楽の専門知識はありませんが、歌声づくりには技能的な部分だけではなく、安定した人間関係も必要だと感じます。専科の先生と両輪で育むために、日常から安定した環境を整えておくことが担任としての役割ですね。卒業式にみんなで歌って感動して別れを惜しむことができるのは、安心できる友達とだからです。そういう意味で、音楽を通して自分を表現することのできる関係づくりはすごく大事だと思います。

子どもの学びを支える私たちのチーム

館：子どもの安心感や安定した学級を整えるうえでの教師の役割は大きいですね。お話にもありましたが、専科と担任、あるいは教科担任制など、昨今は教師陣もチームで動いています。そのような役割分担が進む中で、変化やよさなどは感じていますか？

山根：本校では2月に学習発表会があり、それに向けての指導は担任がするのですが、会の最後に披露する歌の指導は音楽専科の先生にさせていただき、そのときに被るお面などは図工の先生にお願いしています。それぞれで協力しながら学習発表会をつくり上げていく流れができていますね。

和智：私の地域ではほとんど専科の先生がいないので、学級内のことはその担任だけで完結してしまうことが多く、なかなか隣の先生の教室って入りづらい雰囲気があったんですね。でも最近は教科分担が進み、学年のどの教室に入っても同じように子どもと接することができます。その中で、教師全員で見ている感覚がだんだん芽生えてきて、チームで見ることのよさが浸透してきています。

高野：そうですね、自分にはない視点で子どものよさを見つけてもらって気付くこともありますし、音楽で急に能力を発揮したり、実はリズム感がとてもよかったり、専門性をもった先生の指導で子どものよさが開花することもあります。ふだん教室では見せない生き生きとした姿を引き出してもらえる点でも、専科の先生がいてくださるメリットはあると思います。

館：チームで子どもを見る方向に今後も進んでいきそうですね。一方で、最近はさまざまな事情から打ち合わせや情報共有になかなか時間を割けないという問題も起きていま

学校が地域に
あるというのは大事で、
中だけではなく外に発信することも
重要ですね。

○ 徳永明子(とくなが・あきこ)
東京都日野市立平山小学校 主任教諭



す。皆さんの学校ではどのような工夫をされていますか？

徳永：授業終わりに教室へ迎えに行った際に、授業中のちょっとしたトラブルや子どもどうしのけんかなどはその場で報告を受けて引き継いでいます。常勤の先生とは学校でのやり取りが多いのですが、講師の先生だと難しいので、オンラインをフル活用して放課後などに情報共有を行っています。

高野：私も子どものことは授業の前後にその場で共有することが多いですね。授業の進捗状況などは、紙にまとめてもらったり長期休みに打ち合わせをしたりしています。

和智：子どもの情報共有となると紙では難しいですね。昨今の働き方改革で、放課後の時間の使い方が先生によって全く違ってきています。効率的に事務作業をこなし17時半頃には退勤する先生も増えました。そのスピード感に感心する一方、子どもが帰った放課後の少しゆったりとした時間、そのときに先生たちと雑談しながら情報交換をする場も私にとっては大切だなと……。少し寂しく思うのですが、世の中の的にも仕事のスタイルや時間の使い方が変化してきているので、大事なことから優先的に時間をつくる必要があると、最近は特に感じています。

館：昔ながらでは立ち行かない部分も出てきて、子どもの学びを整える教職員体制は過渡期を迎えていますね。

学校生活の中で生きる音楽

館：音楽というのは学校生活ともさまざまに関わっていますよね。そうした場面で、心に残っている子どもの姿はありますか？

高野：やはり音楽会や卒業式などの行事は印象的です。

○ 高野淳美(たかの・あつみ)
東京都日野市立日野第八小学校 主幹教諭



音楽を通して
自分を表現することのできる
関係づくりは
すぐ大事なだと思います。

音楽を通して子どもと教師、
そして学校と地域がつながり、
みんなで子どもを育むことができる。
それがこの教科の
特性ではないでしょうか。



○ 和智宏樹(わち・ひろき)
山梨県上野原市立上野原小学校 教諭

音楽会では、学年が上がるにつれて難しい曲にも挑戦できるようになり、そうしたときの高学年の姿は誇らしく思えますし、非日常的な機会は子どもたちの成長にもつながるので、音楽のある行事の魅力だと思います。

山根：私も前任校のときは行事のたびに歌を取り入れていました。歌うことで全員の気持ちが一つになるような感覚があるんですね。本校では、開校150周年の際に児童発案でおめでとうソングを作成しました。子どもの想いを尊重しながら作成した「青小はたからもの」、今では全校が口ずさめる曲となっています。

高野：音楽があることでその場が盛り上がり、一体感が生まれるのは私も実感します。そういう音楽のもつ力が、学校教育や行事とすごく相性がよいのでしょうか。

徳永：私は校歌を大事にしています。校歌は子どもたちが学校で最初に出会う歌であり、学校に愛着をもつきっかけにしたいと思い、音楽専科の先生にお願いをして校歌をダンスミュージックに編曲していただきました。その曲に私が振り付けを考え「校歌ダンス」をつくりました。毎年、運動会で1年生が披露するのですが、曲が流れると上級生たちも自然に歌い、一緒に踊ってくれます。初めての運動会で緊張している1年生を全校児童で応援するような、温かい雰囲気になるんです。今では始業式でイントロが流れるだけで体が動いてしまうほど、校歌が好きな子どもが増えました。

館：おもしろい取り組みですね。教科の横のつながりに加え、学年の縦のつながりも感じます。地域など学校の外との関わりについてはいかがでしょうか？

山根：コロナ禍を機に防災意識を高めようという試みがあり、みんなで歌をつくり、ラジオに載せて地域の方に知っていただくという企画をしました。音楽を通じて、地域に発信

できるよい機会だったなと思います。

徳永：本校では音楽専科の先生が合唱部の活動にも力を入れていて、地域向けのコンサートを聴いてくださった方から「平山小の音楽で元気が出た、応援しているわ！」と声をかけていただきました。私も彼らの歌声にいつも元気をもらうのですが、こうして地域の方にもパワーを与えられることをうれしく思いますし、やはり学校が地域にあるというのは大事で、中だけではなく外に発信することも重要ですね。

高野：クラスの中に合唱部の子がいると、その子たちが引き上げてくれることで全体的なレベルアップというか、音楽があまり得意ではない子たちもつられて積極的に歌えるようになるんですよね。それが行事などの場面にも生きて自信にもつながるし、音楽以外の学校生活にも影響する。長所を伸ばすことで自然と短所も改善されることを例えた「ハンカチの法則」ってありますよね。私はまさに音楽がそうだなと思いました。

館：学校や地域の中に音楽が生きていて、まさに音楽が学校文化をつくっているようですね。

和智：皆さんが話されたような場面に出会うたびに、音楽は教科教育の側面だけでは見えないことがたくさんあるなど。音楽科の資質・能力などと照らし合わせた議論は重要ですが、教科指導として確立すべき部分とともに、文化をつくり学校を一つにする音楽という+αの価値も認めていくことが大事ですね。徳永先生のように音楽を指導していなくても、自身の強みや持ち味を生かして音楽の楽しさを伝えることもできます。音楽を通して子どもと教師、そして学校と地域がつながり、みんなで子どもを育てることができる。それがこの教科の特性ではないでしょうか。

豊かな情操を育てるために

館：皆さんのお話から学校における音楽の方向性が見えて

きますね。最後に、これからの音楽教育に期待することを教えてください。

山根：先ほどのお話にもありましたが、学校の中での音楽はとても幅広い役割をもっています。だからこそ総合的に子どもたちの人格形成や成長を促すことができると思うので、そういう面で、音楽科の価値がより一層高まればいいなと思います。

徳永：例えばスポーツ選手でも会社員でも、私たち教員もですが、どんな仕事でも優れた働きをするためには「リズムやテンポ感」が欠かせない要素ですよね。それを最初に楽しみながら養えるのが学校の音楽だと思うんです。ふだん言葉で気持ちを伝えるのが苦手な子でも、音楽という形なら、自分の思いを誰かに届けたり表現したりできる。その術を身に付けられることは、その子の将来にとって、きっと大きな財産になりますよね。だからこそ、学校の音楽の時間は、ほんとうに大切なんだなと実感しています。

高野：そうですね。近年、学校体育では、生涯スポーツとして多様な視点を養うことで生涯にわたってスポーツに親しむ態度を養うという動きが高まっていますが、音楽も同じではないでしょうか。生活の中で音楽を楽しみながら、人生をより豊かにしていく。その第一歩というか、基盤となるのが学校の中での音楽だと思います。

和智：現在の学習指導要領には、音楽科の目標(3)に「音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う」とあります。このように学習する楽しさを掲げている教科は珍しいですよ。音楽が育む情操は非認知能力や学びに向かう力を養うこととも密接に結び付いています。情操という部分に焦点を当てて学習をすることの価値や、育てる側の責任の重さも感じますが、そうした教科が学校の中にあることをこれからも大切にしたいし、その価値をみんなが認識することで音楽教育が発展してほしいと一教員として思います。



『高校生の音楽2』『MOUS^{ムーサ}』

高等学校用教科書
内容解説資料

令和9年度から高等学校用教科書『高校生の音楽2』『MOUSA2』が教育芸術社では、音楽科の果たす役割を考えながら、学校教育において新しい時代にふさわしい教科書を目指して編集してまいりました。

新しい『高校生の音楽2』

[コンセプト] 人生を豊かにする教科書

音楽の多様な価値を見出すことで、この教科書に出会った人それぞれの人生が、少しでも豊かになるよう工夫しています。



(教科書P.2・3 口絵)

特徴 1 教材性の高い定番曲を厳選

特徴 4 音楽の魅力や不思議に迫る「音楽って何だろう？」

特徴 2 各教材に学びのヒントを掲載

特徴 5 二次元コードコンテンツの充実

特徴 3 スモール・ステップを意識

A2』のご紹介



改訂されます。
る今日的な課題にも対応した、

新しい『MOUSA 2』

[コンセプト]

卒業後も手元に
残しておきたい教科書

『MOUSA 1』の学習を引き継ぎながら、
音楽をより深く学べるように
編さんしました。



(教科書P.2・3 口絵)

特徴 1 授業スタイルに合わせて選曲できる! ○さまざまなジャンルから教材性の高い曲を厳選

特徴 2 どの教材も扱いやすい! ○日々生徒と接している先生方の実践的なアイデアを具現化

特徴 3 丁寧な学習プロセスの提示! ○生徒が達成感を得られる内容

『高校生の音楽2』は、新しく

1 「楽譜を読もう」新設!

読譜力を身に付けるために、12の小曲を掲載しました。機械的に練習するのではなく、音楽的感性を養いながら取り組める、完成度の高いものを取りそろえました。それぞれ拍子、速度、調、強弱、曲調などが異なるため、表現を工夫しながら読譜力を身に付けることができます。

- スモール・ステップを意識した手順を提示
- 豊かな表現を促すピアノ伴奏音源を収録
- 各曲の読譜に必要な楽典の知識を、ページ下部に提示



(教科書P14)

2 和音に着目して《白鳥の湖》と《春の祭典》を聴き比べよう

「バレエ音楽」を用いて比較鑑賞ができる教材を掲載しました。異なる時代に作曲された2つの音楽を、和音に着目し、旋律との関係やリズムに注目しながら聴き比べる体験を通して、実感を伴った鑑賞活動を行うことができます。

- キーボードなどを用いて和音の特徴を確認する活動
- 手拍子でリズムの特徴を確認する活動



(教科書P112・113)

3 ギター×創作で限られた授業時数を有効活用

ギター教材《Stand by Me》の学習と合わせて、ストローク奏法とアルペジオ奏法を習得しながら、コードを用いた伴奏づくりに取り組みます。構成をしっかりと検討しながら学習を進めることも、即興的に演奏に取り組むこともでき、生徒の実態に応じて柔軟に学習を進められます。

- 器楽と創作の活動を横断的に構成できるため、限られた授業時数でも相乗効果が生まれ、学びが深まります。



(教科書P63)

(教科書P62)

4 学びが深まる歌唱教材! 童謡《シャボン玉》を同声三部合唱に編曲

この教科書のために書き下ろされた、同声三部合唱曲《シャボン玉》を掲載。広く親しまれている童謡を、春畑セロリ氏が編曲したもので、場面ごとに音楽表現を工夫しながら学習を進めることができます。各パートの掛け合いのおもしろさやハーモニーの美しさ、曲想の変化を味わいながら歌唱表現を深めることのできる楽曲です。



(教科書P48)

生まれ変わりました！

歌唱

スモール・ステップを意識し、さまざまなジャンルから教材性の高い定番曲を厳選して掲載しています。

日本歌曲

- 《からたちの花》山田耕筰
- 《かっぱ》三善 晃
- 《いぬ》中田喜直
- 《明日ハ晴レカナ、曇リカナ》武満 徹

ドイツ語の歌

- 《Der Abendstern》R. シューマン
- 《Frühlingsbotschaft》R. シューマン
- 《Ich liebe dich》E. グリーグ

フランス語の歌

- 《Les feuilles mortes》(枯葉) J. コズマ
- 《Lydia》G. フォーレ
- など

器楽

さまざまな楽器を扱い、教材性の高い定番曲を厳選して掲載しています。

合奏

- 《Take Five》P. デスモンド
- 《とげとげタルめいろ》D. ワイズ

リコーダー

- 《Down by the Salley Gardens》
- アイルランド民謡
- 《ピタゴラスイッチ オープニングテーマ》
- 栗原正己

箏

- 《糸しらべ》
- 《茶摘み》
- 《虫の声》

三線

- 《島唄》
- 《花～すべての人の心に花を～》
- など

創作

依頼文をもとに、音楽家になったつもりで創作に取り組む課題を掲載しました。知識や技能を必要としない課題から始めるので、スモール・ステップで学習を進めることができます。

既存の音楽の中から依頼内容にふさわしい音楽を選ぶ



(教科書P.72)

短い音楽をつくる



(教科書P.73)

循環コードを使って1曲仕上げる



(教科書P.74)

西洋音楽の鑑賞

気軽に取り組めるものから、しっかり腰を据えて取り組むものまで、実態に応じて選択できる教材を用意しました。



(教科書P.108)

(教科書P.110)



日本音楽史

各時代の社会の様子や音楽文化の変遷を学ぶとともに、それぞれの時代を代表する音楽を体験できるよう、見開きページにまとめました。



(教科書P.92・93)

新しい『MOUSA 2』では

生活や社会の中の音や音楽、音楽文化の中でも、生徒が触れる機会の多い映画音楽やミュージカルを取り上げました。生涯にわたり音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽への理解を深め、創意工夫を生かした音楽活動につなげることができるよう工夫しています。

映画音楽

100年以上にわたり、多くの人々を魅了してきた映画において、いまや音楽は欠かせないものとなっています。『MOUSA 2』では見開きページで映画音楽を特集しました。国内外のさまざまな映画から5作品を取り上げ、使用されている主な楽曲と注目してほしい場면을鑑賞のヒントとして掲載しています。また、映像と音楽との関係について、対話的な学びを通して考えを深めます。



(教科書P62・63)

日本を代表するアニメーション映画『千と千尋の神隠し』を掲載。世代を問わず親しまれている作品を通して、具体的なイメージをもちながら学習に取り組むことができます。

また、同作品から《いつも何度でも》をリコーダー教材として新たに掲載しました。鑑賞と器楽を横断した授業の構成が可能となり、限られた授業時数の中でも効率的に学びを深めることができます。



(教科書P51)

ミュージカル

フランスの詩人で小説家のヴィクトル・ユゴーの長編小説を原作とする、ミュージカル《レ・ミゼラブル》を取り上げました。鑑賞をする際に物語のあらすじや歌詞の内容、登場人物の心情などを理解しやすいよう紙面構成を工夫しています。また、同作品からミュージカル・ナンバーを歌唱教材として取り上げました。多角的なアプローチによって、個性豊かな歌唱表現の創意工夫にもつなげることができます。

《レ・ミゼラブル》



(教科書P64)

(教科書P67)

ギター

「Let's Play the GUITAR」では、ギター教材を演奏する際に必要となる奏法を解説しています。今回は「イントロ・伴奏フレーズ集」を新たに掲載しました。往年の名曲から印象的な部分を抜粋し、さまざまな奏法を体験します。全曲を通して弾くことが難しい生徒でも、小さな達成感を積み重ねながらギター演奏を習得することができます。

「Let's Play the GUITAR 3」



(教科書P80・81)

● 歌唱教材：《夢やぶれて》(教科書P66) / 《民衆の歌》(教科書P67)

『MOUSA 1』の学習を引き継いで

「主体的・対話的で深い学び」を継続し、音楽についての理解を深め、個性豊かな音楽表現の工夫を促しながら、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と深く関わる資質・能力の育成を目指します。

会話を参考に《初恋》を分析

「主体的・対話的で深い学び」の本質に触れることができます。

「考えてみよう！」コーナーの新設

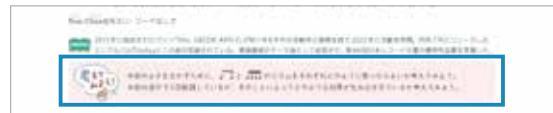
生徒が楽譜に興味をもち、音楽について主体的に考えるきっかけとして、それぞれの楽曲の特徴について、音楽を形づくっている要素などに着目して考えることのできる問いを用意しました。

多角的なアプローチで好奇心をくすぐる

3つの観点から、モーツァルトのオペラ(ジグシュピール)《魔笛》にアプローチしました。口絵では、舞台の様子を大きく掲載し、音楽の世界へといざないます。また、歌唱・鑑賞教材のそれぞれにアリアを厳選し、鑑賞の学習を通して理解したことをアリアの歌唱に生かすことで、より豊かな表現へとつなげます。



(教科書P26・27)



(教科書P49)

(教科書P13)



(教科書P102)

新曲ピックアップ

令和9年度『MOUSA 2』より新しく掲載された楽曲から一部をご紹介します。



(教科書P92)

● 新作合唱曲

この教科書のために書き下ろされた、歌人の木下龍也作詞、佐井孝彰作曲による混声三部合唱曲《背のび》を掲載しています。

● ポピュラー・ソング

幅広い年代、曲想、演奏形態の作品から取り組みやすいものをバランスよく選曲しただけでなく、生徒が日頃から親しんでいる楽曲を精選しました。《ダンスホール》(教科書P.12・13)/《ガーネット》(教科書P.14・15)/《銀河鉄道999》(教科書P.15)/《今宵の月のように》(教科書P.18・19)/《L-O-V-E》(教科書P.82)

● 外国語歌曲

オペラ・アリアや芸術歌曲からポピュラーなものを選曲しました。《Mi chiamano Mimi》(私の名はミミ)(教科書P.40)/《Als die alte Mutter》(わが母の教えたまいし歌)(教科書P.45)

● 鑑賞曲

バロック時代の音楽として、ラモー作曲のオペラ・バレ《優雅なインドの国々》から〈平和の長いパイプの踊り〉、ジャズの要素を含んだガーシュイン作曲の《ラプソディー・イン・ブルー》、『MOUSA 1』でも扱っている「音楽を織りなすさまざまな要素」と関連付けた教材として、ビゼー作曲の《こどもの遊び》op.22などを掲載しました。



(教科書P103)

(教科書P104)

二次元コードコンテンツ

高校生の音楽 2

西洋音楽、世界の諸民族の音楽、日本音楽の鑑賞に役立つ動画などを豊富に収録しています。

ピアノ・ソナタ第14番《月光》の鑑賞動画



こちらの二次元コードより、実際のコンテンツをご視聴いただけます。

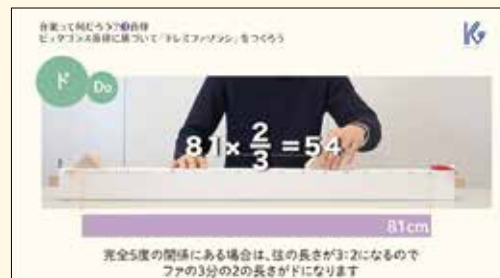


《月光》全楽章のピアノ演奏動画を用意しました。

箏の範奏動画



音楽って何だろう？



世界の諸民族の音楽や「音楽って何だろう？」の動画も用意しています。

MOUSA 2

音声や動画など充実した内容の二次元コードコンテンツを用いて、実際に視聴しながら確認することにより、知識を確実に習得できます。

こちらの二次元コードより、実際のコンテンツをご視聴いただけます。



ア・カペラ曲《明日の木》のパート別音源



ウクレレの範奏動画



教科書に縦書き歌詞が掲載されていない教材は歌詞を表示。その他、発声や楽器の奏法などを動画でサポートします。

共通のコンテンツ

ピアノ伴奏



ピアノ伴奏のある表現教材は
伴奏音源を聴くことができます。



《Andantino》(高校生の音楽2)

ギターの演奏動画
には手元の
アップあり! 弾
き方の確認がで
きます。



Let's Play the GUITAR3 (MOUSA 2)



《Nel cor più non mi sento》
(もはや私の心には感じない)の朗読

外国語歌曲の原語歌詞の朗読や
リズム読みなどで学習をサポートします。



コードの押さえ方をギターと
キーボードによる演奏動画で確認

デジタル・コンテンツの活用につなげる

教科書の創作ページは、キーボードなどを使いながら音の組み合わせやつなげ方を試し、五線に記入する従来の方法に加え、五線の代わりにICT機器や音楽ウェブアプリケーション(「カトカトーン」など)を用いて学習できる内容となっています。

カトカトーンについて

教育芸術社が開発した、ウェブブラウザ上で楽しく感覚的に音楽制作ができる音楽ウェブアプリケーション。



こちらの二次元コードより、
カトカトーンの詳しい
情報をご覧ください。

NEW 教師用WEBコンテンツについて

各教材のワークシート(Word・PDF)やカトカトーンのサンプルファイル(ktk)の他、学習を支援するコンテンツを弊社ウェブサイト内の専用ページからご利用いただけます。

サンプルサイト公開中



高校生の音楽2



MOUSA 2

特別
インタビュー

1

箏が人とつながいでくれる



箏奏者

LEO

聞き手

ヴァン編集部

新しい『高校生の音楽1・2』にご協力いただいたお二人のインタビュー記事をお届けします。まずご紹介するのは、箏奏者のLEOさんです。19歳でデビューを果たし、メディアでも多く取り上げられてきたLEOさんに、学校生活を振り返りながら、箏との出会いや現在のご活動への思いを語っていただきました。

LEO

レオ

言語とは異なるコミュニケーション

Vent (以下、V) : LEOさんは箏奏者として、コンサートだけでなくテレビなどでも活躍されています。箏を始めたきっかけを教えてくださいませんか？

LEO : 僕は幼稚園から高等学校まで一貫のインターナショナルスクールに通っていたのですが、そこでの音楽の授業

でお箏に触れたことがきっかけです。小学校4年生、9歳の頃でした。伝統楽器をやっている人は、代々続く家柄だったり、両親どちらかが音楽をしていたりすることが多いですよ。でも僕の場合は両親ともに音楽家ではありませんし、お箏との出会いは音楽の授業でした。

V : 学校でどのように箏を学習されていたのでしょうか？

LEO : お箏は必修でしたので、一般的な学校の中でのイメー

ジとしては、リコーダーの授業を、お箏でやるような感覚でしょうか。1年間の授業を通して、クラス全員で一緒にお箏を弾きます。さらに希望すれば高校まで続けることができました。僕は中学生の頃から外部のお箏のお稽古に通っていましたが、それまでの1~2年ぐらいは授業が主な演奏場所でした。

V: 授業が箏と向き合う場だったのですね。

LEO: ふだん僕は、家では日本語を使っていたのですが、学校では英語を使わなくてはなりませんでした。そのせいか自己表現ができず、幼い頃はシャイな性格でした。ですので、言語以外で人とつながることができるコミュニケーションツールとしてお箏に強い魅力を感じました。

V: どのような瞬間に音楽が楽しいと感じましたか？

LEO: 当時はまだ演奏技術がないので、音楽を通して人に何かを伝えることはできません。それでも同級生と一緒に舞台上に立って演奏して、それをみんなに見てもらっているということに、言語とは異なるコミュニケーションが生まれている楽しさを感じることができました。初めて触った楽器がお箏だったということもあり、そのままのめり込んでいきました。

V: そのあとに触れた楽器はありますか？

LEO: 中学生の頃に、ベース、ドラム、ギター、ピアノなど一通り触りました。ただ、幼いながらに自分のアイデンティティについて考えていた時期でもあったので、お箏の美学とでもいうのかな。はかなさや美しさ、わび寂びをもつお箏は、自分を表現するには合っているなと思いました。さまざまな楽器に触れてはみましたが、ずっと弾き続けていたのはお箏でした。

転機は16歳

V: LEOさんは19歳でデビューされていますが、いつ頃からプロを目指し始めましたか？

LEO: お箏の道にプロとして進みたいと考えたのは中学生の頃です。ただ決定的だったのは、熊本での「くまもと全国邦楽コンクール」でした。16歳で最優秀賞・文部科学大臣賞をいただいて、そのときに「本気でプロを目指しているんだ」と思えました。

V: コンクールには、受賞を目指して臨んだのですか？

LEO: いいえ。このコンクールは大人が出るようなものでしたし、出場者もプロを目指していたり、すでにプロとして活動を始めていたりするような方々ばかりでしたから。そもそも僕は中学生の頃、このコンクールに音源審査で落ちてしまっていましたし、高校生になってようやく音源審査を通過して、会場で演奏することができたわけです。

V: どのような思いで出場されましたか？

LEO: 他の方がどのように演奏されるか聴きたいなと思っていたので、賞を取ろうという強い気持ちはありませんでした。そのためか、あまり緊張せず舞台上に立てたことが演奏にうまく作用したのかなと思います。高校生の頃もまだまだシャイな性格でしたが、この受賞が転機となり、自信がついて、人と話すことが怖くなくなっていました。

コラボレーションへの思い

V: LEOさんはさまざまなジャンルの音楽に取り組みられていますね。

LEO: もともと、いろいろな音楽を聴くことが好きだったんです。クラシック、ジャズ……、エレクトロニックなダンスミュージックもずっと大好きです。

V: 他ジャンルの音楽への取り組みは、ずっと目指していたことですか？

LEO: 実は10代の頃は、お箏と他ジャンルの音楽は結びつけて考えていませんでした。一時期、ボーカロイドの有名な曲『千本桜』をお箏でチャレンジすることが流行っていたことがあり、僕もやってみたけれど「こういうことやるの、ダサいな」なんて思ったりして(笑)。

お箏は自分の感覚で
自由に音をつくれて、
人とつながることができる。
僕はそこに魅力を感じてきました。



©Takafumi Ueno

V: 意外でした(笑)。

LEO: プロとしてデビューする前は、そう考えてしまっていたんですね。その背景には、「基礎を学び、それから応用へと順序立てて勉強していくように」という師匠の教えがあったからこそだと思うんですけど。

V: 技術の習得を着実に目指そうと考えておられたからこそですね。

LEO: ですがプロとして活動していると、このままだとお箏に興味のない方へのアプローチができないなと感じてしまったんです。そして、やれることから少しずつやっていたと思います。コロナ禍のときはジブリなどの有名な曲を自分で編曲してYouTubeで公開しましたし、クラシック音楽の演奏家とのコラボレーションにも挑戦しました。すると、西洋楽器の技術を学べましたし、クラシック音楽が好きの方にもお箏の魅力を知っていただける機会を得られたと手応えを感じました。

V: よい面が多くあったんですね。

LEO: そのあとは、即興をしてみたいからジャズミュージシャンと一緒に演奏するなど、興味が広がっていき、少しずつ

コラボレーションの機会が増えました。

V: コラボレーションにあたって、大切にしていることはありますか？

LEO: 最初の頃は、選曲を大切にしていました。クラシック音楽もポップスもお箏の楽譜はないわけですから、お箏に合いそうなメロディーの曲であるか、響きを聴かせる余韻はあるのかなどを注意して聴いて、プログラムに取り入れました。ただ最近はさまざまなノウハウがついてきましたので、お箏に合わなさそうな曲でも挑戦しています。

箏の原理はシンプル

V: ふだん演奏中、どのようなことを考えていますか？

LEO: コンディションによって違いますね。すごく集中できているときは、ホールに響く音を客観的に捉えることができたり、一緒に演奏する相手がどう考えて仕掛けていきたいのか、音が言語のように入ってきたりすることもあります。あまり集中できていないときは「このあとお昼ご飯何食べようかな」なんて考えてしまうこともあります(笑)。

V: 演奏していて緊張することはありますか？

LEO: 比較的しないほうだと思います。ただ、どうしてもその本番にかける思いが強かったり、新しい曲が多い本番だったり、とても尊敬する方との共演だったりすると、いつもよりちょっと気合いが入ってしまって緊張につながることもあります。自分のツアーでは、一つ一つの舞台を共演者と一緒に楽しもうと考えているので、リラックスしていることが多いですね。

V: これからさらに挑戦したいことはありますか？

LEO: これまで多くの方々に協力していただき音楽活動を続けてきました。これからもコラボレーションの活動を続けて、今までになかったようなお箏の曲をつくってみたいです。その一方で、古典を追究している邦楽の方と共演し、勉強したいという気持ちが強くあります。オーソドックスな活動もしっかり取り組んでいきたいです。

V: ありがとうございます。最後に学校の先生方にメッセージをお願いします。

LEO: 邦楽器は難しいというイメージがあるかもしれませんが、お箏は、ピアノに次ぐぐらい簡単に音が出せる楽器です。弾けば音が鳴るので、原理としてはとてもシンプルなんです。少し弦を押せば、張力が変わって揺れて、自由に楽しく自分の感覚で音をつくれて、そこから人とつながることができる。僕自身そこに魅力を感じてきました。伝統楽器なので、古典の曲の魅力も感じてもらえたらうれしいですけど、僕としてはリコーダーぐらいの感覚で、みなさんに慣れ親しんでいただきたいです。



● LEO (れお)

1998年横浜生まれ。本名・今野玲央。9歳より箏を始める。音楽教師であり箏曲家のカーティス・バターソン氏の指導を受け、のちに箏曲家・沢井一恵氏に師事。16歳でくまもと全国邦楽コンクール史上最年少 最優秀賞・文部科学大臣賞受賞。2017年19歳でメジャーデビュー。同年、東京藝術大学に入学。MBS「情熱大陸」、テレビ朝日「題名のない音楽会」「徹子の部屋」などメディア出演多数。セバスティアン・ヴァイグレ、井上道義、秋山和慶、沖澤のどかをはじめとした指揮者や、多くのプロオーケストラと共演しソリストを務める。2022年、箏奏者として初めてブルーノート東京でライブを開催。また、同年 SUMMER SONIC に異例の出演を果たしたことで話題を集めた。出光音楽賞、神奈川文化賞未来賞、横浜文化賞 文化・芸術奨励賞受賞。

音楽博士

Dr. Capital

聞き手

ヴァン編集部

アーティストとしてはもとより、大学教授、YouTuberなど幅広く活動するドクターキャピタル先生。中でもポピュラー音楽の分析が分かりやすいと定評があります。その博識さの背景にある、ご経験や音楽への思いを伺いました。

特別
インタビュー

2

音楽を“増やす”
“ため”に

ドクターキャピタル

Dr. Capital

音楽の沼へ

Vent (以下、V) : 改めまして、現在のご活動について教えてください。

Dr. Capital (以下、Capital) : アーティストとしては作品を出し、教育者としては大学、専門学校などで、授業や特別講義を行ってきました。YouTubeやライブはその両方を兼ねて

いて、音楽的な話を取り入れながら、演奏活動を行っています。

V : 演奏一本ではなく、なぜ教えることにも力を入れていらっしゃるのでしょうか。

Capital : 思い返せば、小学生の頃から教えることが好きでした。お小遣いで購入したギターを抱えて、ああでもないこうでもない試行錯誤する中で、「こうすると弾ける！」と発見することが楽しかったんですね。それから、自分で

見つけたテクニックを友達に共有したいという気持ちが生みられました。高校時代には、ギター初心者の方に向けてレッスンをしていました。教えることは、自分のためにもなります。自分なりに見つけたコツも、人によっては混乱してしまうことがあり、また模索する。その繰り返しがお互いの成長につながります。仕事においては、アーティスト活動と並行し、さまざまな依頼を頂いてきました。ギターレッスン、大学の授業などの教える仕事をはじめ、レコーディング、ライブ、作曲など。その一つ一つの仕事を大きくしていくことが重要だと思っています。アメリカでは多くのアーティストが、こうしてキャリアを積んでいきます。

V: 教えることだけでなく、多方面での活動が、アーティストとしての学びにもつながっていくのですね。

Capital: 活動をする中で音楽の力の大きさを感じていて、「音楽を増やす」ために教育に注力しているということもあります。

V: 具体的にはどういったことを「増やす」のでしょうか？

Capital: 音楽を楽しむ時間、音楽自体です。この複雑な世界で、音楽は社会的にも個人的にも大きな影響を与えてくれるものだと感じています。生きる方針や元気の源となつてほしい。そのために音楽教育が必要だと思っています。

V: 学部、修士、博士と、音楽の中でも多岐にわたるジャンルを研究されていたようですが、そういったお気持ちから、触手を伸ばされたのでしょうか？

クラシック音楽とポピュラー音楽、 両方を受け容れ、 同じ目線で分析してみてください。



取材は大阪市内で行われた（2026年1月15日）

Capital: もともとはギターへの好奇心や憧れから始まりましたが、音楽の世界に入ってみたら、ほんとうにいろいろな国の、時代の、ジャンルの音楽があることを知りました。共通するのは、「すべての音楽はリズムに基づいている」ということ。音楽には必ず音の最初と最後があり、“時間”を使ってつくるからです。加えてメロディーの上がり下がり、繰り返し、複数の音の重なりなどの音楽的要素によって感じ方が変わる。それらを知ったとき、よりたくさんの音楽を聴きたいという衝動に駆られました。20世紀の現代音楽、カントリー、ジャズ、ロマン、バロック……要素をどんどん吸収し、演奏で共有しています。幅広いジャンルを聴いてきたことで、アーティストとして自分のスタイルがより自分らしくなったとも感じます。頭の中には2、3種類どころか、1000種類ものメロディーがあり、「この曲のこの歌詞の部分で表したいことには、インド音楽のフレーズが合う」などと響くものを見つけることで、曲を自由に描くことができる。勉強に励んだのは、そのためですね。

V: 研究されているときも仕事を始められてからも、幅広く携わるからこそ、関連して役立っているようですね。

Capital: そのとおりです。全部関係し合うんですよ。

V: メインで教えられているのはどういったジャンルでしょうか？

Capital: YouTubeや書籍ではJ-POPを取り上げていますが、アメリカの大学で教えてきたことは、さまざまです。音楽理論から音楽制作、ソングライティング、アンサンブル、ギターなど。

V: 幅広いですね。印象深い授業はありますか？

Capital: 僕が南カリフォルニア大学の生徒だった時受けていた授業で、スタジオミュージシャンとしてのスキルを育てるプログラムがありました。スタジオミュージシャンは、一人でどのジャンルにも対応しなければならない仕事なので、授業では1つのメロディーを、カントリーで、メタルで、フラメンコで、と即興的に弾けるよう練習します。

垣根を越えて聴く

V: ポピュラー音楽を読み解く鍵となるものは何でしょう。

Capital: 南カリフォルニア大学に就職後、ポピュラー音楽専門の学生にソルフェージュを教えていた際、ポピュラー音楽を分析するための音楽理論カリキュラムを作りました。そこでは4つの要素に注目します。1つ目にポップスのコードやメロディーの多くが、クラシック音楽理論に由来していること。メジャーやマイナースケール、トニック、ドミナント、サブドミナント、セカンドリードドミナントコードなどですね。ただそれらをルールとして捉えすぎず、効果

のある音楽表現のボキャブラリーとして柔軟に吸収することが重要です。2つ目にワールドミュージックの影響。アフリカのリズムや中東アジアのスケール、速弾き、フラメンコギター、インド音楽、インドネシアのガムランなど、あらゆる伝統音楽の要素がポップスで使われています。3つ目に現代音楽。無調音楽やセリエル音楽、ミュージック・コンクレートと実験的な作曲方法がポップスでもたくさん使われています。ビートルズ、デビッドボウイ、YMOやフランクザッパも取り入れました。4つ目にジャズ。クラシック音楽やワールドミュージックに端を発しており、たとえばデューク・エリントンのピアノのコードはドビュッシーに影響を受けています。そうしてジャズとして進化し、枝分かれして複雑化していきました。ポピュラー音楽も影響を受けている、楽器編成やジャズのコード、アド・リブなど、勉強するほど奥深い。この4つは深く関係し合っているの、それぞれをしっかり勉強すれば、ポピュラー音楽の分析力、理解力、作曲力がレベルアップします。

V: 学校現場において、ポピュラー音楽を扱うことはハードルが高く捉えられがちですが、この4つが活用できそうです。

Capital: 大事なのは、まず先生がオープンマインドになり、ジャンルを切り離さないようにするということです。すべて同じように分析してみるのがよいと思います。たとえば、あいみょんの曲のメロディーとコードを書き出して、次にバッハの曲のメロディーと、こちらもコードを書き出してみる。共通点を見つけ出し、「あいみょんのこの部分の動きが、バッハのこの曲でも聴こえるよ」と伝えると、生徒たちは関心をもちます。切り口として生徒たちの好きな曲を取り上げ、クラシック音楽につなげていくと扱いやすいです。ちなみに、日本のようにC durといったドイツ語の呼称を使うことは少なく、C majorという呼び方でどのジャンルも統一していることが多いんですよ。

V: 確かにそうしたほうが、比較しやすくなりますね。

Capital: なるべく生徒に作曲してもらうことも大事だと思っています。大きなものでなくてよいので、1、2小節でも、今持ち合わせるテクニクを使ってつくる。するとその宿題が生徒さんたちの作品となり、いちアーティストとしての実績にもなります。

V: 音楽的な知識や技術を身に付ける上でも、生徒の今の力を生かすことが大切なのですね。

Capital: プレッシャーのない程度で始めるのが効果的です。たとえば、「4分音符、2分音符、全音符という音符があります。それらを使って、4小節のリズムをつくってください」というレベルであれば、周りと比べることもないですからね。

V: 教鞭を執り続けていらしたからこそのご方針ですね。ここまで積み上げるまでに、スランプなどはありましたか？



● Dr. Capital (ドクターキャピタル)

アメリカ出身のシンガーソングライター、ギタリスト、音楽博士、YouTuber。南カリフォルニア大学、ノーステキサス大学、MIハリウッド校教授。現在は大阪を中心に、日本の各所で特別講義やライブを行なう。YouTubeで「Dr. CapitalのJ-POPカバー講座」を配信するほか、自身のオリジナルソング『Sisty』『Jumping John』『One Small Flower』などをリリースしている。

Capital: 相手のリアクションを読み取るというのは日本人が世界一だと思うのですが、アメリカ人の中では僕もちょっと敏感でして(笑)、学生たちの納得していなさそうな雰囲気を感じることもありました。そこで試験時に授業の感想を書いてもらう代わりに、点数をプラスするようにしたら、みんな積極的に書いてくれるんですね。そのフィードバックを前向きに捉え、授業へ反映していくことで、学生たちはより頑張ってくれるようになります。

V: お互いの積極的な姿勢が信頼関係を生むのですね。中でも印象的だったコメントはありますか？

Capital: 最後まで不満を言い続けていた学生がいました(笑)。演奏者としてとても優秀だからこそ、座学は必要ないと思っていたようです。「この学校で一番意味がない試験だ」と言われたこともあります。でもその彼から昨年連絡が来て、「不満を言っていたことを心から謝ります。社会人になってから、キャピタル先生に教えていただいたことがずっと役に立っているんです」と言ってくれました。だから、「あなたが言ってくれたおかげで、僕も頑張れたよ」と伝えました。最終的に満足してくれて、ハッピーエンドですね。

V: とてもうれしいお話ですね! 音楽を増やしていくために、今後行っていきたいことはありますか？

Capital: 自分の曲をさらにつくり、ライブで披露していくことで、まずは僕がいる場所の音楽を増やしていきたいです。そして音楽教育者として、聴きたくなる、歌いたくなる、弾きたくなる、書いてみたくなる刺激を与えながら、みなさんの生活の中に音楽が増えていけばなによりです。



「心の教育ふれあいコンサート」は横浜市ならではの恒例行事となっている

心の教育ふれあいコンサート (令和7年度)

【日程】第1クール(①):9月29日~30日、10月1日
第2クール(②):10月6日~9日
第3クール(③):11月17日~19日

【会場】横浜みなとみらいホール 大ホール

【指揮】松川智哉①、小林雄太②、神成大輝③

【演奏】管弦楽:神奈川フィルハーモニー管弦楽団
パイプオルガン:尾崎麻衣子①、近藤 岳 ②、新田朝香③

【司会】岩崎里衣

【主催】横浜市教育委員会

【共催】横浜みなとみらいホール
(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)

【プログラム】

1. 交響詩『ツァラトゥストラはかく語りき』より冒頭
(R.シュトラウス 作曲)
 2. ポルカ『雷鳴と稲妻』(ヨハン・シュトラウス2世 作曲)
 3. 『アイネ クライネ ナハトムジーク』より第1楽章
(モーツァルト 作曲)
 4. 組曲『くるみ割り人形』より『花のワルツ』
(チャイコフスキー 作曲)
 5. 小フーガト短調(J.S.バッハ 作曲)
 6. ハンガリー舞曲 第5番(ブラームス 作曲)
 7. 行進曲『威風堂々』第1番(エルガー 作曲)
- アンコール『ラデツキー行進曲』(ヨハン・シュトラウス1世 作曲)

今号より不定期連載として「音に触れる感動を—鑑賞教室—」を開始します。全国では多様な音楽鑑賞教室が行われており、地域によって内容もさまざまです。本コーナーでは鑑賞教室を取材し、その特色や子どもたちの様子をお届けします。

まずは、神奈川県横浜市立の全小学校を対象に開催されている「心の教育ふれあいコンサート」です。令和7年秋、10日間に分けて市内約3万人の小学生がプロオーケストラの神奈川フィルハーモニー管弦楽団の演奏を聴きました。コンサートと同日の11月17日に行われた「弦楽合奏部応援プロジェクト」のレポートも本誌24ページからご紹介します。

子どもたちに響きの体験を

令和7年秋、横浜市教育委員会主催の「心の教育ふれあいコンサート」が行われました。

1998(平成10)年に始まった同コンサートは、横浜を本拠地として活動する神奈川フィルハーモニー管弦楽団の演奏を、子どもたちが横浜みなとみらいホールで聴く恒例行事となっています。「音楽に対する感性を磨くことで、心豊かに生きていこうとする資質や能力を育むとともに、クラシックコンサート鑑賞時のマナーを学ぶこと」を目的の一つとして

するオーケストラの生演奏

あいコンサート

開催されてきました。対象は横浜市立の全小学校・義務教育学校（4～6年生のうち1学年）及び希望する特別支援学校の小学部です。28回目を迎えた今回も、10日間で横浜市内約3万人の小学生がオーケストラを鑑賞しました。

初めてのオーケストラ

私たちが取材に訪れた11月17日、心地よい秋晴れの下、「心の教育ふれあいコンサート」を聴くために、海に臨む横浜みなとみらいホールに子どもたちが集いました。開場すると1,000人を超える子どもたちは落ち着いて列に並び会場へ入ります。客席内では辺りや天井を見渡したり、ステージ上の楽器を眺めたりして楽しそうに過ごす子どもたちが見られました。

開演前にはコンサートについてのお話があり、「今日、生のオーケストラを初めて聴く人？」との問いかけには、ほとんどの子どもたちが手を挙げます。「音楽を聴くと、楽しい気持ちは何倍も楽しくなり、悲しい気持ちはやわらぎます。本物のオーケストラを聴いて、音楽の力を味わってください」との言葉に、子どもたちの目が輝いたように感じました。

鑑賞マナーは、拍手の仕方について特に詳しい説明がありました。「ここにいる1,000人が結集して大きな拍手をすること」「指揮者が指揮台に立ったあとはすぐに演奏が始まるので、拍手を止めて演奏に協力すること」などです。そして「この会場は客席が3階までであるので、上から音が降ってくるように音楽が聴こえます。音が消えゆくまで音楽を楽しんでくださいね」と、生の音を楽しむポイントも伝えられました。



28年間演奏を務めている神奈川フィルハーモニー管弦楽団



ホールのパイプオルガンはアメリカ製で「Lucy（ルーシー）」と名付けられている

コンサートは一期一会

プログラムはすべてクラシック音楽の名曲です。1曲目の

「心の教育ふれあいコンサート」を終えて

「児童振り返りアンケート」(抜粋、原文ママ)

- ◎音楽を聴いて「人生に必要な体験だ」と感じた。
- ◎悲しいときや辛いとき、音楽を聴いたりオーケストラに行ったりしたら、元気が出ると思います。
- ◎ふれあいコンサートを聴いて、とてもたくさんの人に、この曲をたくさんの人に聴いてほしいし、いろいろな楽器が重なって、とても綺麗だなと思った。
- ◎とても音楽が豊かで迫力があって、機械を通して聴くよりも絶対生演奏で聴いたほうがすてきに感じました。
- ◎指揮者が言っていた「夢を諦めたらもうだめ」という言葉が心にグッときました。
- ◎最後の曲でみんなで手拍子をしたときに、心一つにして演奏するのが楽しいことをあらためて実感しました。
- ◎音楽を聴いて「またがんばろう」と思えた。
- ◎音楽は楽しくて、幸せにしてくれることを感じました。
- ◎本物の音楽は、心に直接響くことを実感した。

演奏が始まった瞬間、金管楽器の華やかな音に子どもたちは心を奪われたかのようにステージを見つめます。

曲間では作品や楽器について、司会者や出演者が解説しました。オーケストラについての説明では、打楽器、金管楽器、木管楽器、弦楽器と順に楽団員が有名曲のメロディーを披露していき、子どもたちは楽器による音の違いを真剣に聴き比べます。

『小フーガト短調』の演奏前には、横浜みなとみらいホールのパイプオルガンについて説明があり、ホールが海にあることから港町にちなんでカモメの彫刻が施されていることなどが伝えられました。また、パイプが4,632本もあることを聴いた子どもたちは皆驚いた表情をしていました。

コンサートの終盤、指揮者の神成大輝さんが「コンサートは一期一会です。この1回限りの演奏を楽しんでくださいね」と話すと、子どもたちも強くうなずきました。アンコールの『ラデツキー行進曲』では、神成さんは客席側を向いて指揮をし、子どもたちはオーケストラに合わせて手拍子で参加します。友達どうしで互いに顔を見合わせたり体を動かしたりする、うれしそうな子どもたちの笑顔が会場にあふれて「心の教育ふれあいコンサート」は終幕を迎えました。このときの体験が子どもたちの未来に寄り添うものとなることを願っています。

(ヴァン編集部)

弦楽合奏部応援プロジェクト 音楽を生涯の友に

演奏家をプロデューサーに迎えて、企画制作をする横浜みなとみらいホールの自主事業、「プロデューサー in レジデンス」。第3代に就任したヴァイオリニストの石田泰尚^{やすなお}さんは、その一環として「弦楽合奏部応援プロジェクト」を手掛けています。横浜市立南高等学校・附属中学校、市立金沢中学校、市立桜丘高等学校の弦楽合奏部にプロの演奏家が指導を施し、石田さん率いる「石田組 年末感謝祭2026」の開場時に演奏を披露するまで見届けます。

「心の教育ふれあいコンサート」終演後に、同ホールのリハーサル室で3校そろっての合同練習が行われました。この日は石田さんをはじめ、ヴィオラの中村洋乃^{ひなのり}理さん、チェロの弘田徹さんが練習に参加されました。

熱意あふれる生徒たちは、開始前から黙々とウォーミン

グアップをしています。指導者の3人が到着すると背筋を伸ばして静まり返り、間髪入れずに通し演奏が始まりました。曲目はホルストの『セントポール組曲』です。民族舞踊特有の軽快なリズムが緊張感を高めます。初の3校合同練習、最初の演奏は力が入っているためか硬さも感じられましたが、テンポの合わせ方について指摘を受けると、部分的に取り出して練習を重ね、柔軟さを取り戻していきました。指導者の3人は自身のパートを越えて指導にあたり、弓の使い方や各楽器の役割などを意識するように教えていました。特に強弱については、メリハリの大切さを伝えます。**p**のときに出してしまう緩みに対し、小さい音でも神経を使い、周りの音をよく聴くよう助言していました。

「すごくよくなっているよ」という石田さんの声掛けに呼応するように、音が繊細になっていき、最後にはまとまり



石田さんの話と音に耳を傾ける生徒たち



パートを越えて指導する中村さん



全体演奏では集中力が高まっている様子



にこやかに丁寧に、指導する弘田さん



成長の早い生徒たちを前に、指導にも熱が入る

方に大きな変化が見受けられました。

今回参加していた南高等学校2年の伊藤紗良さんは、チェロの指導について、「強弱についてアドバイスいただいた部分を意識したら、思った以上に体力を使い、今までは意識しきれていなかったのだと気付きました」とやり切った様子でした。

プロの音楽家を目指す人は限られます。大人になってからも、趣味としてでも音楽を続けて欲しいという石田さんの思いを込めて、自らが指導し、一緒に演奏する機会として同プロジェクトを企画されたそうです。「中学から弦楽器を始めたという子も多い中、本当に成長したと思います。今日も『喜びを感じて弾いて』と言ったら、音が変

わって、うれしかったですね。とにかく楽しんで弾いて欲しいです」と石田さんは語ります。また今日初めて立ち会ったという中村さんは、「弾けているので、思わずレベルの高い要求をしてしまいました」と振り返り、弘田さんは、「とても真面目で、反応がしっかりできる生徒たち。緊張をほぐし、コミュニケーションが取れるような雰囲気をつくるよう心掛けていました」と生徒への向き合い方に心を配っている様子でした。大きな舞台での経験を通して、生徒たちそれぞれの音楽人生が豊かになることを、確信する時間となりました。

(ヴァン編集部)

※文中の学年は、当時のものです。



「第63回京都市小学生のための音楽鑑賞教室」オーケストラ：京都市交響楽団／指揮：辻博之（2026年2月2日～6日・京都コンサートホール）

まだ寒さの残る2月上旬、京都コンサートホールで「第63回京都市小学生のための音楽鑑賞教室」が開催されました。演奏は京都市交響楽団（以下、京響）。日本で初めて自治体直営のオーケストラとして誕生した京響は、音楽を通じたひと・まちづくりを掲げ、教育プログラムを推進してきました。子どもたちの活気にあふれた会場の様子をレポートするとともに、企画を牽引する京都市音楽教育研究会会長の日比野晶子先生、副会長の栗野亜希子先生・宮下佐知子先生にお話をうかがいました。

第63回京都市小学生のための 音楽鑑賞教室

【プログラム】

1. 『京都市歌』（藤山於菟路 作詞／諸井三郎 作曲）
 2. 『バイレーツ・オブ・カリビアン』（バデルト 作曲）
 3. 楽器紹介コーナー
 4. オルガン楽器紹介&演奏
『トッカータとフーガ ニ短調』から「トッカータ」
(J.S. バッハ 作曲)
 5. 行進曲『威風堂々』第1番(エルガー 作曲)
 6. 『ワルツィング・キャット』（アンダソン 作曲）
 7. 歌劇『イーゴリ公』から
「ダッタン人(ポロヴェツ人)の踊り」(ポロディン 作曲)
- アンコール『Believe』(杉本竜一 作詞・作曲)

京都市小学生のための音楽鑑賞教室は、1962年に始まった伝統ある行事です。京都市音楽教育研究会、京都市教育委員会、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団の協働により実施されています。対象は国立や私立を含む市内の小学校・義務教育学校前期課程・総合支援学校。希望制ではあるもののほとんどの学校が参加しています。主に5年生向けにプログラムが編成されていますが、学校によっては4年生や6年生が鑑賞に訪れるケースもあるそうです。

第63回を迎える今年度は5日間にわたり全10公演が行われました。取材した2月3日の公演でも、午前と午後で計35校から子どもたちがホールに集まり、約70分間のプログラムを楽しみました。

手話で始まる鑑賞教室

ホールの舞台に並ぶのは、3管14型の大編成のオーケストラ。明るい挨拶とともに登場した辻博之さんの指揮のもと、オープニングを飾ったのは『京都市歌』でした。現在歌い継

“わが京都”の響き

取材協力：小山人加（音楽学・アートマネジメント／ユースワーカー）

がれている市歌は3代目。戦前から活躍した作曲家、諸井三郎によって1951年につくられました。会場の子どもたちはオーケストラの演奏にのって、市歌を歌い出します。そして「ひかりの都 わが京都」というサビの部分にさしかかると、どの学校の子どもも手話を付けて歌唱を続けました。この取り組みの背景には、2016年に制定された「京都市手話言語がつなぐ心豊かな共生社会を目指す条例」（手話言語条例）があります。京都は手話発祥の地とされ、障がいのある人々の社会参加を推進してきました。条例に伴い、学校教育においても手話の理解促進が図られる中、もともと鑑賞教室で歌っていた市歌の一部に手話を付ける案が導入されました。舞台上では、代表の子どもたちが総合支援学校等の先生と一緒に手話のお手本を披露。参加校の中には、サビ以外の歌詞もすべて手話で練習してきた子どもたちの姿もみられました。

オーケストラから 好きなところを一つ見つけよう

京都ならではの形で始まった鑑賞教室は、指揮者の辻さんによる軽快なトークで進行していきます。辻さんは声楽科出身で、朗らかな声で会場に問いかけます。「オーケストラには何人の奏者がいるでしょう」「ヴァイオリンの弓は何の動物の毛でできているのかな」。クイズを交えながら、各楽器の特徴についてポイントをしばって紹介し、子どもたちの興味を刺激します。楽器紹介に続く、桑山彩子さんによるパイプオルガンの独奏で、会場の空気は一変。厳かな雰囲気が



ドイツのヨハネス・クライス社によるパイプオルガン。90のストップと7,155本のパイプを備え、西日本最大と言われている



コロナ禍の第58回開催時に配布されたDVD

漂います。さらに、オルガンを含む管弦楽曲が奏でられると、その響きと迫力に多くの子どもが圧倒されていました。そうした重厚感のある『威風堂々』に対して、猫の鳴き声のようなフレーズを含む『ワルツィング・キャット』では、辻さんが子どもたちに「ニャオ」とまねてみようと呼ぶ場面も。親しみやす

い音楽で盛り上げた後は、大編成の管弦楽曲『ダッタン人の踊り』で魅了し、オーケストラの表現の幅を示しました。

アンコールでは、『Believe』で子どもたちが再びオーケストラと共演しました。ここでも辻さんのアイデアが光ります。いきなり歌うのではなく、客席のブロックごとに「ド」「ミ」「ソ」の音程を割り当て、ハーモニーをつくる発声練習をしてから曲の演奏に入りました。『Believe』による共演は、コロナ禍が明けて声を出せるようになり、今年度から導入された取り組みで、会場の一体感を高めていました。多様な編成と様式を体験できる曲目に加え、曲間で指揮者によって繰り出される多彩なアプローチは、子どもたちから能動的な参加を引き出していたと言えるでしょう。「この鑑賞教室で、みんな一人ひとりが一つ、好きなところ、好きなことを見つけてくれたらうれしい」と願いを語っていた辻さん。指揮のまねをしてみたり、じっくり音色に聴き入ったり、さまざまな形で子どもたちが音楽に親しむ時間が展開されました。

地域の音楽の宝物が詰まったコンサート

このように京都市の鑑賞教室では、地域の誇る豊かな資源が存分に活用されています。会場は音楽専用ホール。そこを拠点とするプロ・オーケストラに加え、パイプオルガンの生演奏まで体験できる、宝物をつめ込んだような企画です。また、コロナ禍で集団行動が制限された時期は、京響が鑑賞用に演奏を収録し、解説等を付けたDVDを全校に配布していました。このエピソードからも、オーケストラも鑑賞教室の継続をいかに大切にしているかがわかります。さらに、この鑑賞教室は地元企業によるメセナ活動（直接的な利益や宣伝効果を求めず、社会貢献の一環として企業が行う芸術文化支援のこと）に支えられている側面をもちます。1960年代から市内全校を対象としてきた本企画は、2009年度に市の財政難により鑑賞料と交通費の参加者負担が増えたと報じられました。それに伴って参加校が減少した事態を受け、株式会社ゼロホールディングス（当時はゼロ・コーポレーション）は2010年以降寄付を通じ、子ども1人当たりの負担軽減に貢献しています。一つの行事が長期にわたり継続することで、結果的に京都で育った親世代や先生がかつて経験した鑑賞教室を、現代の子どもたちも体験できるという、地域文化としての循環が維持されています。子どもが帰宅し、鑑賞教室での出来事を家庭でも共有する姿を想像すると、学校ごとの取り組みであっても地域全体のものとして続けることの大きな意義が見出されます。

音楽家が音楽家として 語りかける言葉のちから

——鑑賞教室では、アナウンサー等が解説や進行を務める場合も多く、従来は京響でもその形式だったそうですね。今回は、指揮者が司会を兼任していました。

栗野：子どもたちの中には、指揮者ってどこか難しい人なんだろうと思っている子もいます。そこに、辻さんが「指揮者です！」と言って明るく登場すると、子どもとオーケストラの距離が一気に近付くんです。

日比野：京響さんの想いとして、音楽をつくっている指揮者が自ら子どもたちに語りかけることを大切になさっているのだと思います。『ワルツィング・キャット』では、辻さんの合図で会場から「ニャオ」の大合唱が起きました。また、初回公演の『Believe』のとき、歌声が少し小さいと辻さんは感じたのでしょう。次の公演から声出しとして『カエルの歌』の輪唱を取り入れ、今日はハーモニーをつくりました。公演ごとに子どもたちの様子を見て、何ができそうかを考え、寄り添ってくださっています。『Believe』を通して、オーケストラの音楽を味わい、自分の声の響きも感じながら歌う体験のすばらしさを実感しました。

栗野：一流の指揮を見ながら歌うのは、本当に気持ちがいいことなんだろうな、学校では絶対経験できないことを勉強しているなど感じますね。

アウトリーチとの違い、 みんなで聴くことの意義

——音楽家や劇場等によるアウトリーチとして、小規模な



左から、京都市音楽教育研究会の宮下佐知子先生、日比野晶子先生、栗野亜希子先生

活動も普及してきています。音楽家が学校に来ること、ホールに子どもたちが聴きに行くこと。両者の違いや、それぞれの活動の効果についてどのようにお考えですか。

宮下：授業内の活動では、学習内容について打ち合わせが重要になります。鑑賞のCDを流すのと、実際に来ていただいて演奏してもらうのではまったく違う訳ですが、それでもポンと1回聴くだけで終わってしまったら、子どもたちの中に印象としてあまり残らないところがあります。しかし、例えばある部分を繰り返し演奏していただき、どの楽器がどんな風に使われているか、どんな風に音色が変わるかといった対話ができたら、それは学校内だからこそできることだろうと思います。また、お箏や尺八などの和楽器の演奏体験も学校内だと可能性が広がりますし、それぞれの良さがあると考えています。

栗野：鑑賞教室については、これが生まれて初めてホールに来て、生のオーケストラの演奏を聴く経験になる子がいるのではないかと思います。場合によっては、人生の最初で最後かもしれない。そう考えたとき、一生に一度の機会にこの場所に足を運び、友達と一緒に音楽を聴くというところに、大きな意味があると考えています。開催日の朝、子どもたちはいつもより早い時間に、ちょっとおしゃれな服装をして登校します。ホールに入るときと演奏を聴いた後では、足取りも全然違うんです。すてきな音楽と一緒に、心もピカピカにして帰って行く様子は、この経験のすばらしさを物語っています。

日比野：CMなどで流れてくるクラシックを耳にするだけで、意識的に音楽を聴いていなかった子が、ここに来てオーケストラを目の当たりにして、その響きを感じ、日常空間ではないところで音楽を味わう良さを体験する。豊かな情操を育む上で、とても大切な機会です。



『ワルツィング・キャット』で、「ニャオ」と鳴きまねをするタイミングの合図を客席に送る辻さん（写真中央）



『ダッタン人の踊り』の鑑賞を終えてオーケストラに拍手を送る子どもたち

想いの継承と価値の発信

——京都市音楽教育研究会の先生方が関係団体とやり取りしながら運営する上で、悩みや課題はありますか。

日比野：ホール使用に当たっては、これまでの経験から各校に対するマナーの周知徹底の重要性を感じています。また、近年の働き方改革の影響などから、スタッフが集まりにくくなっている。それでも、私たちが鑑賞教室の運営に寄せる想いを、後輩の先生たちに示すことが大事だと考えています。

宮下：研究会の中には、鑑賞教室以外にもさまざまな活動が含まれるので、敷居が高いと感じられる部分もあるかも



この鑑賞教室というきっかけを「人生の宝にしてほしい」と願いを語る先生方

しれません。ですが、鑑賞教室のお手伝いなら引き受けてくださる先生もいて、そこをきっかけに鑑賞教室を推進するような気運を高めていけたらと思っています。

——寄付者であるゼロホールディングス（以下、ZH）の方々とはどのように関係性を築いていますか。

日比野：教育委員会のサポートとZHさんのご寄付のおかげで、市内のほぼ全児童に音楽体験を届けることができ、感謝の念に尽きません。ZHさんは会場にも来てくださるので、感謝の気持ちを直接お伝えし、子どもたちが喜んでいる姿もご覧いただいています。また、活動の発信も重要です。市役所で行われる寄

付受納式の様子は、松井孝治市長がSNSでも伝えていました。教育委員会の広報や各学校のホームページなどでも発信しています。先輩たちが途切れさせずに大事にしてきた想いを引き継ぎ、これがいかに大切な活動か知らせていきたいです。

粟野：広まったらいいなと思う出来事として、4年生のとき『ファランドール』の鑑賞で体を動かす活動を取り入れ、「王の行進」と「馬のダンス」を学んだ子どもたちが、5年生になって鑑賞教室に参加したことがありました。公演中の客席を見てみると、その子どもたちがオーケストラに合わせて体を動かしながら聴いていたんです。学校で音楽の楽しさを学び、ここで改めて生の演奏に感激しながら、友達と一緒に体を動かして聴くことができます。こうした鑑賞教室のもたらす価値が、もっと多くの先生方や関係団体に届くことを願っています。

日比野：実は京都市音楽教育研究会では、子どもたちがホールの舞台に立ち、歌や演奏を披露する「学童大音楽会」も開催しています。これは希望校のみの参加ですが、こうした企画や各学校の授業での実践を積み重ねてきた成果として、2027年度に近畿音楽教育研究大会京都大会を開催する運びとなりました。京都コンサートホールで子どもたちの研究演奏の場も設けます。ぜひ、全国の皆さんにこのすてきなホールにお越しいただき、音楽教育についても考えていけたらと思っています。

小山文加（おやま・あやか）

音楽診断

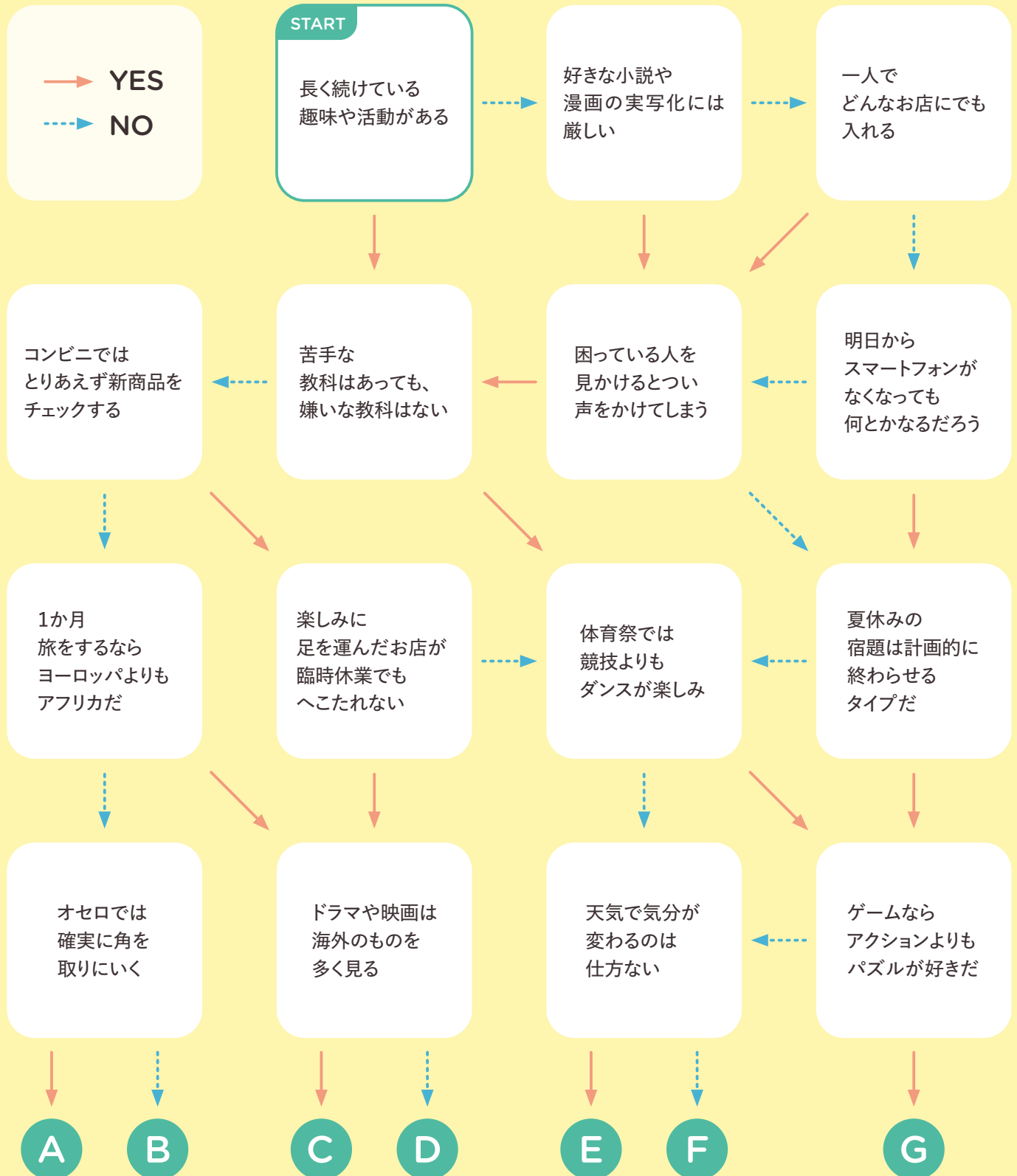
Kyogei Presents

第26回 女性作曲家編



『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第26弾のテーマは女性作曲家です。7人の中から、あなたにおすすめの作曲家をご紹介します。

監修・解説 = 萩谷由喜子 Text = Yukiko Hagiya



女性作曲家って何だろう？

歴史上、女性作曲家が少数だったのは、音楽創造は神に近い仕事との通念から、劣性とされる女性が遠ざけられてきたという事由が大きい。そのため、作曲に必要な専門教育を受けたのは、音楽家の娘か、理解ある親をもった女性など一握りに過ぎず、教育機会が得られて曲を書いても出版までは許されないことが多かった。20世紀後半頃から女性作曲家が社会的に認知され始め、21世紀ではもはや「女性作曲家」の範疇が意味を失いつつある。

B 記念日ごとに夫と作品をプレゼントし合った クララ・シューマン (1819~1896/ドイツ)

著名なピアノ教師の父からピアノの英才教育を受け、少女ピアニストとして早くから演奏活動を開始する一方、当時の演奏家は自作自演が不可欠であったため作曲も専門の師に就いて学び、11歳で作品1を出版する。ロベルト・シューマンと結婚後、創作は下火となったが生涯に約30曲を書いた。最大傑作は『ピアノ三重奏曲ト短調』。



D 障壁を乗り越え自分を貫いた エイミー・ビーチ (1867~1944/アメリカ)

ニューハンプシャー州の上流家庭出身。元ピアニストの母親からレッスンを受けて16歳でピアニスト・デビュー。18歳でボストンの医師と結婚。夫の希望で作曲に活動を絞る。夫没後に渡欧。自作の『交響曲ホ短調』と『ピアノ協奏曲嬰ハ短調』がベルリン・フィルに演奏された。これによりベルリン・フィルに曲が採り上げられた初のアメリカ人作曲家となった。



F 教育に力を入れた多才な芸術家 幸田 延 (1870~1946/日本)

教養をもって将軍家に仕えた元茶坊主の家に明治3年に生まれ、幼児期から邦楽を学ぶ。明治政府が洋楽普及のために招聘したアメリカ人教師に見出され、のちに東京藝術大学音楽学部となる文部省音楽取調掛に入所。ピアノ、ヴァイオリンに秀で、第1回文部省派遣留学生に選ばれてアメリカに留学。ウィーンでも学び、日本人初のソナタ形式による楽曲2曲を作曲。



萩谷由喜子
[音楽評論家]

専門は女性音楽史、日本のクラシック音楽受容史。1990年代より新聞、雑誌に執筆。著書に『五線譜の薔薇』『音楽史を彩る女性たち』『幸田姉妹』『田中希代子』(以上ショパン)、『宮澤賢治の聴いたクラシック』(小学館)、『蝶々夫人』と日露戦争』『ウィーンに六段調』(以上中央公論新社)、『音楽家の伝記はじめて読む1冊』シリーズ『クララ・シューマン』『幸田延』(以上ヤマハ)、『ショパン・コンクールの100年』(アルファベータブックス)等。

あなたのタイプの作曲家は？

A 自立を実現した革命家 セシル・シャミナード (1857~1944/フランス)

パリの音楽愛好家庭に生まれ楽才を発揮。当時のパリ音楽院は女性の入学不可だったため、両親は同音楽院の教授たちに家庭レッスンを依頼した。オペラやバレエも書いたが、サロン小品が人気を集めて楽譜がよく売れ、女性として初めて作品出版によって生計が成り立ったという。代表作は『コンチェルティエーノ』『スペインのセレナーデ』等。



C 社会情勢に負けず、ヴァイオリンの名手としても活躍 グラジナ・バツェヴィチ (1909~1969/ポーランド)

音楽一家に生まれる。ワルシャワ音楽院でヴァイオリンとピアノを専攻、卒業後はヴァイオリニストとして活動したのちパリに留学、ナディア・ブーランジェに作曲を師事。第二次世界大戦中はワルシャワの地下組織で音楽活動を行い、戦後は作曲に絞る。ヴァイオリン作品が多いが、『ピアノ・ソナタ第2番』はツィメルマンの録音で知られる。



E 感受性豊かな才媛 リリ・ブーランジェ (1893~1918/フランス)

代々の音楽一家出身。幼児期から楽器演奏と語学の神童だった。6歳年上の姉ナディアと共にパリ音楽院でフォーレ他に師事。1913年にカンタータ『ファウストとエレヌ』でフランスの作曲家の登竜門ローマ大賞を受賞(女性初)。色彩的な和声と巧みな楽器法による器楽曲、歌曲、未完のオペラ『マレーヌ姫』を遺し24歳で夭折。



G 独自の世界と新たな響きを求め続けた ソフィア・グバイドゥーリナ (1931~2025/ロシア)

ソ連時代のロシアが生んだ国際的な作曲家。タタール自治共和国出身。カザン音楽院を経てモスクワ音楽院に学ぶ。新しい音律を模索して当局から批判されたが、ショスタコーヴィチに激賞されて自身の道を進み、ギドン・クレーメルらに楽曲を提供。ペレストロイカ後ドイツに移住。『声…沈黙…12楽章の交響曲』『終末の光明』等が代表作。



Information

2026年に予定されている
主な研究大会やイベントをご紹介します。
※各大会の内容は変更になる場合がございます。

10 October

22日(木)・23日(金)

第67回 九州音楽教育研究大会 熊本大会
第66回 熊本県音楽教育研究大会 熊本市大会

市民会館シアーズホーム夢ホール(熊本市民会館) 他

〈大会主題〉

感じ取ろう 伝えあおう 高めあおう 音楽の喜びを

[問い合わせ]

熊本大学教育学部附属中学校 米満 繁
〒860-0081 熊本市中央区京町本丁5-12
TEL 096-355-0375/FAX 096-355-0379
kumaonken@gmail.com

29日(木)・30日(金)

令和8年(2026年)度
全日本音楽教育研究会 全国大会
(幼・小・中・高等学校部会大会) 奈良大会
第68回 近畿音楽教育研究大会 奈良大会

なら100年会館 大ホール 他

〈大会主題〉

音楽で培おう シンの力

[問い合わせ]

斑鳩町立斑鳩南中学校 校長 上西秀勝
〒636-0133 奈良県生駒郡斑鳩町目安北3-1-77
TEL 0745-74-5800/FAX 0745-74-5978

11 November

6日(金)

第57回 中国・四国音楽教育研究大会 香川大会

全体会場：サンポート高松 大ホール

〈大会主題〉

ときめく瞬間 響き合う 音と心

[問い合わせ]

香川大学教育学部附属高松小学校 三好賢太郎
〒760-0017 香川県高松市番町五丁目1番55号
TEL 087-861-7108/FAX 087-861-1106
miyoshi.kentaro@kagawa-u.ac.jp

13日(金)

第68回 北海道音楽教育研究大会 釧路大会

釧路市生涯学習センター(まなぼつと幣舞) 他

〈大会主題〉

音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育

[問い合わせ]

釧路市立湖畔小学校 教頭 斎藤貴子
〒085-0806 釧路市武佐2丁目27-16
TEL 0154-46-1151/FAX 0154-46-1152
kus.onken@gmail.com

13日(金)

第74回 東北音楽教育研究大会
第62回 宮城県音楽教育研究大会 仙台市大会

日立システムズホール仙台(仙台市青年文化センター)
他

〈大会主題〉

音楽で広げる輪 つなげよう未来へ
～感性を働かせて
仲間と「味わう音楽」「生み出す音楽」～

[問い合わせ]

仙台市立川前小学校 校長 大槻千秋(実行委員長)
〒989-3212 仙台市青葉区芋沢字赤坂16
TEL 022-394-2225/FAX 022-394-6727

Spring Seminar

スプリングセミナー2027

— 新作合唱曲による公開講座 —

コンクール自由曲向けの新曲発表会「スプリングセミナー2027」を開催いたします。

同声・女声・混声の作品を作曲者、司会者、合唱団と学びます。

※詳細や最新情報は弊社ウェブサイト等でご確認ください。

●日程：2027年3月下旬開催予定

●お問い合わせ：

株式会社教育芸術社

スプリングセミナー実行委員会

TEL 03-3957-1168

FAX 03-3957-1740

<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>

20日(金)

第68回 関東甲信越音楽教育研究会 栃木大会(那須大会)

大正堂くろいそみるひいホール
(那須塩原市黒磯文化会館)

〈大会主題〉

分かち合い つながり広がる 音楽の学び
～実感！心が動く音楽の力～

[問い合わせ]

那須塩原市立大原間小学校 教頭 矢板浩美

〒329-3156 那須塩原市方京3-14-6

TEL 0287-67-1055 / FAX 0287-65-2694

es-ooharama@city.nasushiobara.ed.jp



最新情報は弊社ウェブサイト
で随時公開いたします。

<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は、スプリングセミナーの
Facebookでも発信いたします。

<https://fb.me/kgsspringseminar/>

内容は予告なしに変更となる場合がございます。



教育芸術社ウェブサイトでは、上記の研究大会や
この他のイベントなどの情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

詳細は
こちら



編集後記

季節が巡るたびに、時代の移ろいや自身を取り巻く環境の変化に思いをはせることがあります。巻頭でお届けした座談会で、司会の館先生は「時代とともに学校教育も変わる。だけど、学校の中でも音楽を楽しむ子どもたちの姿には代えがたいものがあり、そこに音楽科としての変わらない本質がある」と総括されました。今号からの新連載「音に触れる感動を一鑑賞教室―」では、身体に直接響く生の音を堪能する子どもたちの姿が印象的でした。こうした学校と地域がつながる取り組みは、まさにデジタル化の時代における音楽科の本質を捉えたものではないでしょうか。

新しい『高校生の音楽』『MOUSA』の紹介にちなんだ特別インタビューでは、お二人の気さくな人柄と丁寧な所作からも、音楽と真摯に向き合う姿勢が感じられる取材となりました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。リニューアルした『ヴァン』もご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
まちょ

写真撮影
島崎信一 (STUDIO S-PLUS)
津久井珠美
フォトライフ

写真提供
日本コロムビア
藤原道山
横浜市教育委員会

イラストレーション
KAnaMi

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社
(代表者 市川かおり)
〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
TEL. 03-3957-1175(代)
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
JASRAC 出 2601993-601
NexTonePB000057419号
©2026 by KYOGEI Music Publishers. ©-26
本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられております。

*ヴァンは「vent」はフランス語で「風」。
新しい音楽教育の地平を切り開いていく
願いを込めています。



Recommend

7訂版 歌はともだち

○ 童謡・唱歌をはじめ、授業や行事、集会で歌いたい愛唱歌、子どもたちに人気のポップス曲など133曲をバランスよく取り上げ、持ち運びやすくコンパクトな1冊にまとめました。

● 定価420円(本体382円+税10%) / B6判 / 176ページ

指導用伴奏集 (別売り)

○ 歌集『7訂版 歌はともだち』に準拠した伴奏集です。

● 定価6,050円(本体5,500円+税10%) / B5判 / 3巻セット(ケース入り)

● ISBN978-4-86779-119-6

準拠CD (別売り)

○ 歌集掲載曲の模範演奏を収録しています。

● 各価格9,900円(本体9,000円+税10%) / 各4枚組

● 上巻: GES-16157~16160

● 下巻: GES-16161~16164



小学生のための合唱パート練習用CD

トリオン13・14

○ 合唱のパート別の歌とカラピアノが収録されているので、伴奏者がいなくても簡単に音取りができます。

○ 収録曲(トリオン13): #みんなで歌おう~歌声と幸せがあふれますように / いい日にしようね / ハートのアンテナ / 手をつなごう~共に生きる~ / 群青 / 虹

○ 収録曲(トリオン14): このみち / 夕焼けの心 / 365日の紙飛行機 / HANABI / フェニックス / 帰る場所

● 各価格3,300円(本体3,000円+税10%)

● トリオン13: KGO-1217 ● トリオン14: KGO-1218



同声合唱曲集 ことばを追いついて

宮本益光 作詞 / 三宅悠太 作曲

○ 「スプリングセミナー2023」での『ことばを追いついて』の初演をきっかけに、宮本益光さん書き下ろしの詩から生まれた同声合唱曲集です。

○ 収録曲: ことばを追いついて(同二) / 誰か一人を救っても(同三) / みんな みんな(同三) / 君が信じる番(同三)

● 定価1,980円(本体1,800円+税10%) / A4判 / 40ページ

● ISBN978-4-86779-123-3



クラス合唱用 MY SONG 8訂版

○ 定番曲から新曲まで、魅力的なラインナップを収録しました(全63曲)。

○ 難易度や対応する「ONTA」の情報、各曲の解説など、選曲に役立つ情報を目次に掲載しています。

● 定価870円(本体791円+税10%) / B5判 / 360ページ

● ISBN978-4-86779-112-7

準拠CD (別売り)

● 各価格9,240円(本体8,400円+税10%) / 各4枚組

● 上巻: GES-16144~16147

● 下巻: GES-16148~16151



Chorus ONTA Vol.30

○ 授業に、音楽会に、コンクールに、さまざまな合唱活動で高い評価をいただいている混声合唱のためのパート練習用CD第30弾です。

○ Vol.30発売記念ボーナストラックとして『名づけられた葉』の新録音を収録しました。

○ 収録曲: 群青(混三) / 群青(混四) / 越えてゆけ(Coda付き) / 空色の日々 / 眩しく光る歌 / 心の声 / 一輪の花 / Amazing Grace / Edelweiss / Ave Maria / すべてのもの / いにしへの道 / 僕らはいきものだから / 名づけられた葉(飯沼信義 作曲)

● 価格13,200円(本体12,000円+税10%) / 4枚組

● KGO-1213~1216



小学校・中学校・高等学校教科書訂正のお知らせ



教科書及び指導書の訂正を当社ウェブサイトに掲載しています。誠に恐れ入りますが、ご確認のうえ、ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

教育芸術社 LINE公式アカウント



ぜひお友だち登録
してください♪